

■寄稿

ITC時代を振り返って： これからのITCへの要望と期待



■前ITC所長 中村 洋

私は、2007年秋から2011年9月までのほぼ4年間、慶應義塾ITC所長を務めました。所長就任時には、ハード面でのネットワークの整備が既に進みつつありましたので、組織運営といったソフト面での強化・拡充が私の主な役目だったように思います。また、幸いなことに、副所長の先生が3名体制となり、私が不得意なIT技術面での専門知識が要求される分野に関しましては、副所長の先生方（萩野先生、中村修先生）にタスクチームのリーダーになっていただきました。

一方で、ITCからの塾内・塾外に向けての情報発信につきましても、副所長の横田先生にタスクチームを組んでいただき、積極的に取り組んでいただきました。また、ITCにはITを必ずしも専門としないスタッフの方も多いのですが、その方々にもこのタスクチームに入っていただき、ITの専門家でなくても分かる内容での広報活動ということで、大いに活躍していただいたように思います。

ITCに来て感じたのは、日頃ネットワークが問題なく使うことができているのは、多くのスタッフの方の努力によるものだということです。多くの教員にとって、ITCのスタッフと接することはあまり多くありません。何かトラブルが起きた時に接するため、ややもすれば、ユーザーの皆様からの批判をお受けすることがあります。しかし、日々起こる大小さまざまなトラブルにうまく対応し、システムをうまく機能させていくのは簡単なものではないと強く感じました。

その点に関連し、2011年3月の東日本大震災はITCにとっても大きな試練でした。当日の復旧作業だけでなく、その後の輪番停電への対応、電力節約など、課題は山積でした。経費節減を進めていく時期と重なったこともあり、各地区のITCの先生方ならびに、押見淳ITC本部事務長を始め、ITC本部、各地区スタッフの皆さんの努力は賞賛されるべきものだと思っております。

一方、所長時代の一番悲しい思い出は、当時の小林啓樹ITC本部事務長が任期中に亡くなられたことでした。私が所長に就任した時の事務長で、各キャンパスと一緒に訪問したことが大きな思い出です。特に広報活動にご尽力いただきました。この場をお借りして、ご冥福をお祈りします。

これからのITCへの要望と期待

慶應義塾ITCは、今後も大学・一貫教育校ならびに塾外への貢献を高めていかなければ

なりません。そのために、今後の課題として2点述べたいと思います。第一は、慶應義塾のネットワークシステムの適正利用のための、塾内での広報ならびに教育・啓蒙のさらなる充実です。ネットワークシステムを適正に使用しないと、塾内システムのみならず、塾外の方々に多大な迷惑がかかってしまうことがあります。慶應義塾では毎年多くの新しい学生が入ってきます。日々進化するテクノロジーのスピードに合わせ、積極的な活動が、これまで以上に必要になります。

第二のポイントは、大学間の連携強化です。昨年の中日本大震災以降、大学間での連携の必要性が急速に高まってきました。また、その他の点でも、各大学とも同じような課題を抱えており、それぞれで興味深い数多くの取り組みが行われてきました。私立、国公立の垣根を越え、お互いが学びあい、さらなる発展のために、これまで以上に連携を進化・発展させていくことが重要だと思っております。

最後になりましたが、慶應義塾ITCが発展し、内外でさらに貢献していくことを祈念しております。

ITCからの発信



■前ITC副所長 横田 絵理

2005年秋にITCの副所長を拝命してから6年間、年報でいえば2号分の期間を務めさせていただきました。本校では前号に引き続き、私が関わってきた広報ワーキンググループ活動をふまえ、ITCからの発信の心をお伝えします。

前中村所長時、各副所長がそれぞれ担当する3つのワーキンググループが創設され、私の担当は「広報ワーキンググループ（WG）」でした。広報担当に任じられた理由は、副所長中、ダントツにITに疎いのが私であったことに尽きます。そこで課された広報WGの活動は、慶應義塾内外にITCの活動をわかりやすく伝えるためにはどうしたらよいかを検討することでした。確かにITCの毎月の会議に出ていますと、私には全くわからない言葉がいつも飛び交っていました。最初のころは毎回会議のたびに落ち込んだものです。ただ、ありがたいことに同様の気持ちを共有してくださるかたから「ITCで何をやっているかをユーザーに伝わるようにしよう」という働きかけがあり始まったのが広報WGでした。つまりWGでは「わからないといってもよい」という前提から始まっていたことが私には何より、ありがたいことだったのです。何がわかりにくいのか、どんなところで理解につまずくのかを念頭にさまざまな媒体を毎月検討しました。たとえば新入生へのITCについての説明やアカウントについてのアナウンス、ITCのパンフレット、共有ファイルソフトや著作権についての啓蒙パンフレットなど、いずれもわかりやすさ、伝わりやすさを心がけ、練りに練りました。WGのメンバーの熱意、安易な妥協をしない姿勢とチームワークに頭が下がることもしばしばでした。おそらくこうした検討の過程はITCの広報だけでなく、慶應義塾の印刷物のいずれでも行われているプロセスなのだと思いますが、日頃何気なく手に取る印刷物がこんなにも高い問題意識と熱心な検討の結果生みだされたものだという事を、自分が一端に関わる機会を経て、恥ずかしながら改めて自覚しました。

WGにとって、ITCのwebリニューアルと関連し、各キャンパスで使っているITC関連の用語が異なるという現実への対処も課題でした。もともとはIT関連用語をわかりやすく解説しようという話から派生したものでしたが、各キャンパスで活用している用語が実は同じ内容を指しているながらも、キャンパスごとの歴史的な経緯の下に使われているために異なっていることが意外に多くありました。パソコンが置いてある部屋の名前やITCの窓口の名称など微妙に異なったりもしていました。もちろんそれぞれの用語は、各キャンパスでなじんでいるので、もしも学生が基本的に各キャンパスから移動せず学生生活を送るということであれば、この違いを気にする必要はないのかもしれませんが、キャ

ンパス間のアカウントの共通化や1、2年から3、4年へとキャンパスを移動することも
あるという現実の中では、可能ならば用語を統一する必要性もありました。そこで用語の
洗い出し作業、それぞれの意味の確認の上、用語を共通化するかどうかを決め、その言葉
を解説するという作業が続きました。新しいITCのwebではこの検討結果が少なからず反
映されているはずです。

さて、もう一つお伝えしたいことは、なんとといっても2011年に起きた東日本大震災後の
対応でのことです。ご存知の通り震災後の節電は塾全体の重要なミッションです。しかし、
ITCが管轄している設備の多くは電気を動力として動いているものばかりで、しかももは
やインフラとして学内では動くことが当たり前になっているITにはどのような影響があ
るのか、電力不足によってどのような影響がもたらされるのかが震災直後の問題でした。
加えて夏の電力不足のときには、いかにITC関連で節電が可能なのかも課題となりました。

なかでも、夏の電力不足への対応とそのアナウンスについてはWGでずいぶん検討しま
した。ITC管轄の施設は電力を使わざるをえず、また暑さに弱い機械ばかりです。そうは
いっても夏の計画停電への対処は必須で、その際のITCの対応方針をユーザーにわかりや
すく伝えることを広報WGでも検討することになりました。停電時にITCシステムの何が
使え、何が使えなくなるのか、どのように対応すべきか、そしてどうやって伝えるのかな
どを検討しました。検討するなかで、ITC管轄のハードだけでなく、事務室内のポット、
冷蔵庫など徹底的に電気を使用する機器の電源を極力落とすことを自発的に皆さんが実践
しているとうかがい、その問題意識の高さに感動したことを覚えています。その真摯な検
討の成果は、ITCのホームページに掲載されているのでぜひ一度ごらんいただければ幸い
です。

ITCの副所長の任務を卒業しましたが、6年の間に、日ごろ何気なく活用しているITが、
問題意識と責任感によって高レベルに保たれ、日々検討がなされながら利便性を強化し、
レベルもあがっていることを認識することができました。

IT技術はどんどん高度化し、教育も研究もその影響を受けて、また時に影響を与えて
います。多岐にわたる研究領域を抱える慶應義塾にあっては、ITCへの要求は複雑化し範
囲もレベルも広く高くなっています。安定したITのインフラの担い手としての役割と、
新しい課題への迅速な対応に加え、ユーザーへの情報発信とユーザーの声を反映する役割
もITCは持っていることを改めて認識した6年間でした。

今後も一人のユーザーとしてITCにお世話をかけることが多いでしょうが、6年間で感
じたことを忘れずに、ITCからの発信の心を受け止めていきたいと思っております。お世
話になった皆様に感謝をこめて。